読破っ！

読破した作家さんや
同じ作家の本を何冊も読む魅力を教えてください

HIDEHIKO

理屈っぽいところから始めると、そもそも「読破」ってどういう意味でしょうか？Biglobe サーチ辞書で調べると、

読破　（名）スル　　本を終わりまで読みとおすこと。すべて読みつくすこと。読了。
「大作を―する」

（三省堂「大辞林 第二版」より）

とありました。このことから、ある作者の全作品を読みとおすことになるようです。（あたりまえじゃんという声が聞こえてきますが・・・）

従って、現在活躍している作家では難しいですね。読破したと思ったらすぐさま新作が発表されたりして。では、物故した作家ないしは歴史上の作家ならこれ以上作品を発表できないので読破できる！と考えました。

でも、枕草子、源氏物語、はたまた徒然草にしても受験時代の拾い読みの域を出ていないのです。作者不詳の竹取物語や御伽草子は読破しましたが、作者が特定できないのでは意味ないですね。（ところで Wikipedia によると、御伽草子はなんと 300 篇余りあるといわれ、世に知られているのが 100 篇強らしいというあいまいなモノでした！従って、御伽草子は読破していませんでした。読破したのは岩波文庫でした。）

竹取物語のように、一遍しか発表していない作家は読破と言えるのか？　という点も押さえておきましょう。詩人では金子みすずや萩原朔太郎の詩は全部読んだので、読破と言えますか。宮沢賢治は童話は読破しましたが、詩は一部しか読んでいないし、論文となると全く読んでいないので、だめですね。

そこで、気を取り直して、アーサー・コナン・ドイルなんかはどうでしょうか？　シャーロック・ホームズ全集（長編 4 編、短編 56 篇の計 60 篇）は読破しました。三度位読破したかな。エベレストに 3 回登頂したみたいな感覚ですね。でも読破した作家ではないですね。SF やホラーは読みましたが、歴史小説はほとんど読んでいないし。ドイル自身は歴史小説で評価してほしいと考えていたそうですから、だめですね。

ほぼ読破したのは江戸川乱歩ですが、ほぼというのは、晩年の少年探偵団等のジュブナイル物は読破していません。アダルトものは小説・随筆を含めて読破しましたよ。

というわけで、ジャンル分けすれば読破した作家はいるが、ある作家の全作品を読破したことはないという結論です。

USAO

うさおです。確かに読破した作家さんはいません。強いてあげるなら黒川博行か志水辰夫かな。作品数が少ないからね。
作風の心情的には志水だが、マニアックな点で好きなのは黒川だ。文体も読みやすいし、一日あればおおよそ読み終えることが出来る。うさおもどちらかと言えば、速読派だが小説は速読してもあまり面白くない。プロットは終えるが余韻は無い。学術書はほとんど速読で何が言いたいのか分かる箇所だけ丹念に読む。余韻を必要としないからね。その割に学術レポートを書くときに、抒情的な表現は沢山思い浮かぶのだが勿論後で大幅に削除することになる。
黒川は高校の美術の先生だったそうな。いいなあ、うさおもそんな風になりたかったぞ。クラスの担任は何だか煩そうなので、人とのしがらみが嫌いなうさおは、それはお断りだが悠然と趣味に生きるところ、趣味が仕事なこと、美術室に一人でいられることなど楽しそうなこと満載だ。
したがってお勧めは「ぶんぶく茶釜」。関西風のノリとギャラリィーフェイクの鑑定団のノリが大変面白いですよ。
志水辰夫はハードボイルドな割にコーネル・ウールリッチのような甘ったらしい心根が好きなのだ。なんだかとっても片意地張って生きていても、なんだかとことんのハードボイルドになりきれない。
うさおみたいだ、優柔不断で・・・・部下にああだと言われたら反発する割にそうかなと思う。上司にこうだと言われたら従順に従う割にそうかなと思う。「こだまでしょうか？」
お勧めの本は「帰りなん、いざ」です。タイトルが抒情的でお気に入りです。あと「裂けて海峡」とか、何となくそれだけで本の内容が判っちゃうようなやつ。
同じ本を何回も読むのは、図書館に行って前読んだかどうだかわからず借りてきちゃうからです。ビデオ屋さんのように「前もお借りですがよろしいですか」と図書館の人も問いかけてもらいたいね、うさおは・・・・。

TICA

読破した作家というのを定義付けをせず各自の判断にお任せしました。生きている人とか、１０冊以上出している人とか、小説に限るとか。この辺のことを悩ませてしまったようで申し訳ありません。でも、全く自由な解釈でよかったのです。このように↓

亡くなった作家を除外すると、乙一、金城一紀、天童荒太、宮部みゆきを読破した。東野圭吾と宮部みゆきの新刊がまだ手つかずに本棚に入っているが、読んだ数としては一番ではないかと思うので、もはやこれはもう東野圭吾は読破したに分類していいだろう。

宇江座真理と雫井脩介は読みもしないのにこれは嫌いっていうのが何冊かあってそれは一生読まないので、これもまた読破に入れてしまってもわたしにはなんら問題はない。また天童荒太が誰かと共著として出しているものも読んでいないがそれも許す。自分には甘い。という具合にかなり乱暴な読破の基準だがそれでも乙一、金城一紀だけは自信があった。
本の情報を遮断していたわけではないのに、一ヶ月以上、新聞・雑誌・テレビやヤフーニュースなどメディア関連にはまるで眼を通さないで来たら揃いも揃ってその二人が新刊を出していたのをいずれも先週の土曜日に知った。ここまで来たらこの企画が終わるまで知らないでおきたかった。
それにしても乙一。普通の生活を送っていてほしくないとイメージしている有名人の一人だったのだけれど。
乙一は新刊「箱庭図書館」の他にも「jojo's bizarre adventure 4th another da」というのも出版していた。ただ新刊もジョジョも純粋な乙一の小説というわけじゃない。ジョジョはあの有名なジョジョだし、新刊は素人が書いたものを同じテーマで乙一が書くとこうなるといった企画もの。
10 年くらい前、深夜の爆笑問題の本の番組のゲストが乙一で、イメージ通りの人だと嬉しかった。先週の「王様のブランチ」はそのとき以来の乙一だった。ほんとに読んでいるのかさえ疑いたくなるようなおねーちゃんにインタビューを受けていた。新作についても「僕はボツになることを想定して企画を出した」と胸を張って語っていた。そんなことを乙一は言っちゃいけない。結婚をし、子供も生まれ、劣等感がなくなり、本も映画化になった。驚かせたい気持ちや書きたいものはもう枯渇したような乙一だった。
ということで、自由な解釈をせずに普通の言葉で言うならば、小説に限れば読破したのは天童荒太だけ、全著作だとすれば読破した作者はいないということになりますです。

ちなみに懐かしい名前の幽霊会員１のグリコに訊いてみたところ…
【村上春樹もほぼ読んでるけど、「国境の南、太陽の西」は途中で挫折してるからだめだし。奥田英朗、吉田修一、川上弘美あたりはもしかしたら読破してるかなぁ】
挫折なんて問題ないです。これは村上春樹、読破！です。
閣下さんは金城一紀（著作数８冊）、伊藤計劃（著作数３冊）を読破していました。伊藤計劃は亡くなってしまい、もう著作が増えないことを嘆いていました。
懐かしい名前の幽霊会員２のがみちゃんは「たぶん東野圭吾と真保裕一」とのこと。
この「たぶん」はがみちゃんの性格からいってもかなり怪しい。東野圭吾は恐るべしの人です。でも確かにがみちゃんが読んでいる量は半端じゃないから疑ってはいけません。

ところで、日本の小説家で著作数（小説に限る）が一番多いのは誰か知恵袋で訊いてみたところ誰の名前が挙がったと思いますか？

Y.YAZAWA

読破した作家はいません。面白いなあ、と思って図書館にあるその人の本を出来うる限り読もうと思った作家はいます。思いつくままに列記すると山本周五郎、司馬遼太郎、陳舜臣、井沢元彦、阿刀田高、清水義範、山崎洋子、という感じかな。
山本周五郎は「小説日本婦道記」や「あおべか物語」が印象に残っています。いまでも疲れたときに彼の短編を読むと気持ちが和むのを感じます。日本人が誇れる作家だと思います。
司馬遼太郎は昔よく読みましたが、今は殆んど読みません。多くが長編で疲れます。また登場人物が皆張りきりボーイで、その点でも読んで疲れます。おそらく今後読むことはないと思います。
陳舜臣によって僕の中国の歴史の知識の大部分がもたらされました。「中国の歴史」とか「中国五千年」とか「小説十八史略」とかが印象に残っています。「中国の歴史」は今でも机のすぐそばに置いて、辞書代わりに使っています。
井沢元彦は 20 年前、週刊ポストに連載が始まった「逆説の日本史」で知りました。面白いことを言う人だな、と思っていろいろ本を探した。「暗鬼」という新潮文庫の本が、歴史を舞台にした推理小説で抜群の出来だと思いました。
阿刀田高はどうして巡り合ったんだろう？よく覚えておりませんが、「○○を知ってますか」シリーズが好きです。ユーモアや知的ゲームを扱ったエッセイも面白い。
清水義範は「単位物語」が面白くて、読み始めました。「面白くても理科」とか、社会、国語、数学を題材にしたエッセイが面白いです。ただ、時々はずれがあります。
山崎洋子は僕には珍しく女性作家です。いままであまり女性作家で面白いと思った人がいない。一時付き合っていた女性が向田邦子がいい、というので読んでみたけど僕には面白くなかった。田辺聖子とか瀬戸内晴美なんかもあまり読もうと思いません。だけど山崎さんは面白かった。何だか忘れたけど直木賞を取った推理小説が面白かった。それがきっかけで図書館で借り始め「元気が出る恋愛論」「日本恋愛事件史」「歴史を騒がせた悪女たち」「伝説になった女たち」など女性ならではの視点が新鮮で魅力的です。
まだ二冊しか読んでいないけどこれから読破してみたい作家もいます。鯨統一郎、という人です。「邪馬台国はどこですか」と「新・世界の七不思議」がとても面白かった。この人ならきっと他の本も面白いに違いありません。以上私の好きな作家達です

【完読作家】

今回の企画は完読作家ということだが全てというとエッセイ・評論の類や雑誌・新聞掲載で本になっていないものも含めるのか考えてしまう。お気に入りの作家でも食指の動かないジャンルの作品もあるのでほぼ完読という作家しかいない。比較的よく読んでいる作家は高橋克彦、宮部みゆきあたりだが高橋克彦は浮世絵や東北の歴史など学究的な作品まで眼を通しているのに大河ドラマになった「炎立つ」「時宗」が未読。宮部みゆきは「ドリームバスター」、「ブレイブ・ストーリー」などのファンタジー系の小説が未読。どちらにしても現役の作家は知らないところで作品を発表していることもあってよっぽど好きな作家でないと完読といっていいのか怪しいところもある。そこで故人ならと考えたところでは江戸川乱歩、星新一あたりでエッセイや評論を含めても読み尽くしている。乱歩の作品リストで確実と思われるのが写真の「幻影の蔵」だ。これは 2004 年に初めて乱歩の蔵書を保管している土蔵が公開された際に購入したもの。著者はミステリー研究家で蔵の中を 12 年にわたり調べたもので乱歩の足跡・著作リスト。蔵書リストを網羅している。付録にＣＤ－ＲＯＭがついていて乱歩邸・土蔵の中をバーチャル体験できる映像と乱歩の蔵書を検索できるデータベースが収録されている。

土蔵の公開時には蔵の入り口から先はアクリルで遮断されていて中には入れず入り口から見渡すだけだったのでＣＤは貴重な資料といえるが 8,400 円は結構きつい出費だった。乱歩への入り口は少年探偵団だったが徐々に大人向けのものにものめりこみ乱歩関連の評論・特集の類も含めると一番つきあいの長い作家と言える。実際、いろいろな出版社から全集が出たが作品がかぶっても装丁が違うのでついつい買ってしまっていた。

星新一はショートショートだけでも１０００以上の作品を残しているが世に出るきっかけに一役かったのが乱歩であるのは不思議な縁だが有名な話だ。星新一のエッセイを読むと柔軟な発想・ものの考え方など参考になることが

多くむしろエッセイが出るのを楽しみにしていた時期もあった。
完読を目指しているのは司馬遼太郎と東野圭吾だが司馬遼太郎の作品は長編が多いのと 43 冊目が絶筆となった紀行文「街道が行く」が控えているので当分実現出来そうにない。
東野圭吾は読みやすさもあるがミステリー作家にとどまらない幅広いジャンルの作品を手掛けていてそれぞれ底に問題提議が含まれていることが多く奥が深い作家だ。出身が理工系とあって取材力・分析力がしっかりしているし専門的な事を分かりやすく組み込み読者の興味をきらさない工夫があるので目下完読を目指している。未読のものは初期の作品が多く今更、書店で買うのも馬鹿らしいので図書館で借りようと思うが予約が多くて借りられない。仕方がないのでブックオフの半額セールでまとめ買いをしている。最近の読書リストに東野作品が多いのはそんな理由からだ。新刊のものはほとんど読んでいるので今は週刊誌や月刊誌に掲載されて単行本になっていないものを図書館の雑誌コーナーを漁って読んでいるが昨今は無断持ち出しをする輩も多いらしく欠号があり他地区の図書館へ行くこともある。

完読で思い出したが東野圭吾の三社合同企画で悔しい思いをしたのが「東野圭吾公式ガイドブック（無料配布）」だ。写真のように出版された本が表と裏表紙にびっしり並べた装丁になっている。
2011 年 3 月 3 日「麒麟の翼」講談社(刊行済み)、6 月 6 日「真夏の方程式」、9 月 9 日「マスカレードホテル」集英社と単行本が出版されるが発売時に大型書店で配布するというもの。文庫版ながら 192 頁あり本になった全タイトルに著者のコメントと上記 3 作品の関連記事を掲載したものでぜひとも入手したかったがこれを知ったのは「麒麟の翼」に入っていたチラシなので時すでに遅かった。療養で勤めをやめて外出が減ったのと地元振興のため近くの書店を極力利用していたのも理由のひとつだが、全然気が付かなかったのがちょっと口惜しい。配布の方法も予約特典にした書店もあるし地方の書店の方が却って簡単に入手できたところもあるようだ。次回は 6 月 6 日の「真夏の方程式」刊行時だが今度は事前に手を回すつもりだ。ただ、今回の読書リストにあるように「真夏の方程式」は図書館で週刊文春のバックナンバーを借りて読んでいるし、「マスカレードホテル」も小説すばる掲載時に読んでいる。気に入ると雑誌、単行本、文庫と 3 回買うことになり蔵書癖があるのも不経済だなあと思うがままならない。

「読破した作家」は「いない」が結論になるけれど、好きな作家がいるのになぜ読破しないのか？ できないのか？わたしのように、嵌ったらしつこいタイプの人間に読破した作家がいないなんておかしい、なんて考えたりもするのですが。
たとえば村上春樹、小説は好きだけれどエッセイはほんの数冊しか読んでいません。別に人となりを知りたいわけでなし、小説を読めば自ずと人となりはわかるはずで。
小川洋子さんも、小説は読んでいるけれどエッセイは数冊どまり。
もしやと思って昔嵌っていた海外ミステリーの巨匠、エラリー・クィンを wikipedia で調べてみたら、あまりの多作にびっくりする始末。
ひとりの作家を読破するためには、こまめな情報収集も必要だろうし、エッセイはちょっと・・とか言ってはいけないということです。そして、なんにつけひとりの人の創作を追い続けていくと、人にはピークと言えるときがある、というふうに感じます。自分と波長が合う時期と言ってもいいですが、好きな作家の作品の中でも「この頃が一番好き」なんて言葉をつい言ってしまう自分がいる。この頃が一番だけど、他の作家より面白いし安定感があるし人となりや考え方が好きでずっと読み続けてしまう。
「聴破」しかり「視破」しかり、って音楽や映画監督を追うってことですが。
ところで、読破してはいないのですが、小説に限りなら全て読んでいる、ポール・オースターについてちょっと触れさせていただきたい。日本で翻訳されている作品が少ないので読破をめざせばそれなりと思うけれど、詩集はたぶん読めないし、エッセイは妙に難解です。なぜあそこまでエッセイを難しく書けるのか理解できない・・

- 孤独の発明（*The Invention of Solitude* 1982）
- ニューヨーク三部作（*The New York Trilogy* 1987）
  - シティ・オブ・グラス/ガラスの街（*City of Glass* 1985）
  - 幽霊たち（*Ghosts* 1986）
  - 鍵のかかった部屋（*The Locked Room* 1986）
- 最後の物たちの国で（*In The Country of Last Things* 1987）
- ムーン・パレス（*Moon Palace* 1989）
- 偶然の音楽（*The Music of Chance* 1990）
- リヴァイアサン（*Leviathan* 1992）
- *Auggie Wren's Christmas Story* 1992
- ミスター・ヴァーティゴ（*Mr. Vertigo* 1994）
- ティンブクトゥ（*Timbuktu* 1999）
- 幻影の書（*The Book of Illusions* 2002）
- *The Oracle Night* 2003

トマソン隊「貝山地下壕」で登場したグリコ隊長お薦めで入門したオースターですが、読みにくいけれど面白い。どこが面白いかと言うと、自分をとことん追い詰めていくしか生きる方法を知らない主人公たちの生きざまが面白い。
（「*The Oracle Night*（オラクル・ナイト）」以下は日本では未翻訳）

- *The Brooklyn Follies* 2005
- *Travels in the Scriptorium* 2007
- *Man in the Dark* 2008
- *Invisible* 2009

そして彼は映画との係わりも深く、脚本、監督を務めた作品もあります。自身の生まれ育ったブルックリンのタバコ屋を舞台にした「スモーク」はとっても良質の映画。オースター自身が稀代のヘビースモーカーだということだけれど、このご時世、かれもタバコから足を洗ってしまっただろうか？この三作は脚本が文庫化されているのでもちろん読んでいます。詩集は無理だけど脚本は読めます。

- スモーク（*Smoke* 1995）
- ブルー・イン・ザ・フェイス（*Blue in the Face* 1995）
- ルル・オン・ザ・ブリッジ（*Lulu on the Bridge* 1998）

←こちらは先月紀伊国屋ホールで開かれた、オースター作品全てを翻訳している柴田元幸氏のトークショーの案内。氏が出している「モンキービジネス」という雑誌がオースター特集を組んでいるのに合わせて開催。モンキービジネスは広告が一切ない雑誌。本の売り上げだけで運営されているらしい。広告だらけの雑誌が多い昨今、その意気はすごい。

この先も「読破した作家」は現れなくても、「読破したいくらい好きになる作家」とは出会えるかもしれない。それを期待して。

YUKO

「読破した作家」
内田康夫　　宇江佐真理　　高田郁

＜内田康夫＞
読破するのにはかなりの量。浅見光彦のファンになったために次々と読み続け、すべて読破しました。もちろん「えっ・・？？」と言うようなのもありました（内田先生ごめんなさい）
浅見シリーズの見どころ（読みどころ？）は水戸黄門の見どころと同じ。
控えおろう・・このお方をどなたと心得る（あり得ないと思いながら、やけに胸がすっとする）の所ではあるが、その土地にまつわる様々な事柄を知る事で、居ながらにして旅行に出かけたような気分になれるのが、内田作品の一番好きな所。
これだけの数読むと、どれがどれだか解らなくなるのも本心で、リストを見てもどれがどういう物語だったのかぜんぜん思い出せない。
実は内田作品のＮＯ１は「死者の木霊」だと思っている。文句なしに面白かった。これは

内田先生が自主出版されたもので、江戸川乱歩賞に応募し、まったく選考対象にならなかったのに、進呈されたその時の審査員の一人が「これ、応募すれば必ず入賞したのに・・」と言ったとか言わないとか・・・それも肯ける作品だった。
浅見光彦倶楽部会員である私は、一番に浅見シリーズを挙げたいが、浅見シリーズで一番好きなのは「平家伝説殺人事件」私がエキストラでＴＶドラマに出演した「津和野殺人事件」も捨てがたい。
＜宇江佐真理＞
大好きな作家を一人と言われると、今は宇江佐さんを挙げる。
時代小説を書き始めた私の目指す、読んだ後暖かい気持ちが残る・・そういう作品が多く、いらいらした時など、何よりの常備薬。という訳で、すべて読破。
いつも手元において何度でも読みなおせる。函館に住みながら江戸を書く。
これは広島に住みながら江戸を書きたい私にとって、大きなお手本。一番最初に読んだのは「卵のふわふわ」一番何度も読んだのは「甘露梅」好きなのは「桜花をみた」「涙堂 琴女癸酉日記 」映画は不作だったけれど「雷桜」
そして今宇江佐さんのエッセイ「ウエザ・リポート　笑顔千両」をバイブルのように持ち歩いている。
＜高田郁＞
最近読み始め、作品数が少ない為早くも読破した高田作品。
みをつくしシリーズはまず題名の美しさで購入、面白さにのめりこんだ。
巻末にその本で出てきた料理の作り方も載っており、私もいろいろと作ってみて簡単で美味しく感激した。みをつくしシリーズは５弾目でこれからの展開も楽しみ。
あ・・・高田郁さんはコミック作家との事で、コミックもあるようだが、コミックは読んでいないので読破とは言えないかも・・・すべて文庫本で発行されており、「出世花」「銀二貫」とみをつくしシリーズ「八朔の雪」「花散らしの雨」「想い雲」「今朝の春」「小夜しぐれ」読破と言ってもこれがすべてです。

本は心を豊かにすると良く言われますが、私にとっては本は精神安定剤。
疲れた時や嫌な事があった時、好きな一冊を読んでいると心が落ち着き、ま、いいか・・と受け止められる。読破なんて言っても、好きなものを読み続けた結果、すべて読んじゃったという事にすぎないのです。

日本の小説家で一番本を多く出している人は、中島梓（栗本薫名義も含めて）だそうです。
信じるも信じないもあなた次第・・